

A(7) 草原が育んだ文化について学ぼう

■プログラムの概要

阿蘇では、草原の草が牛馬の飼料としてのみならず、茅葺き屋根や風呂の焚き付けなど暮らしに必要な資源として大事に利用されてきました。生活様式の変化により暮らしの中で草が利用されることはほとんどなくなりましたが、草原を利用する中で育まれた文化は、身近なところにまだ残っています。

このプログラムでは、草の利用とともに育まれた文化について学びます。長く引き継がれてきた草原利用の知恵やワザ、行事や慣習などがあること知り、草小積みづくりを通して草原に残る文化的資源について学びます。

草原と地域の暮らしの関わりを知ることで、阿蘇の草原の魅力や草原を守ることの大切さに気づくことができるでしょう。

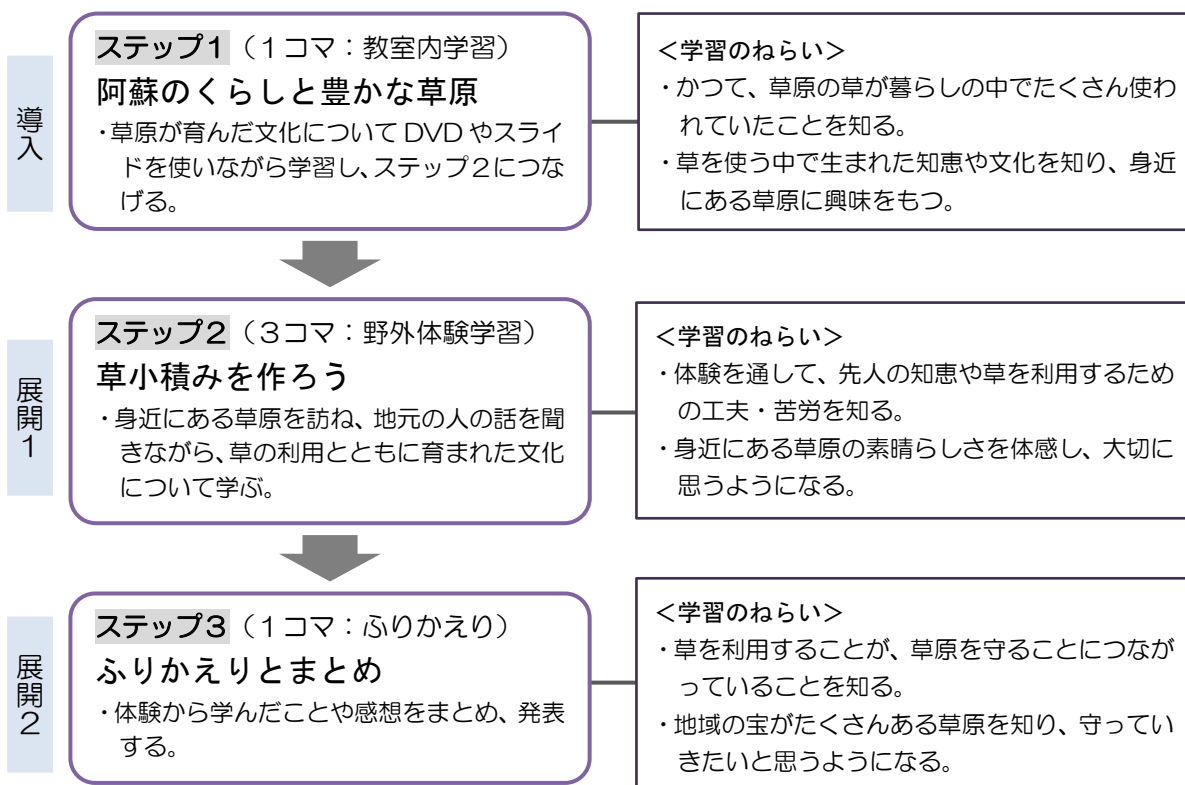
【関連する教科】総合、社会
【技能】見る、聞く、作る
【実施概要】

- ・所要時間：全5コマ
- ・実施場所：教室、草原
- ・対象：小学校4年生～
- ・実施時期/季節：9月～10月頃

■プログラムのねらい

- ・草原と地域の暮らしの関わり、草の利用とともに育まれた文化に触れる。
- ・草原には地域の宝がたくさんあることを知り、守っていききたいと思うようになる。

■プログラムの流れ



ステップ1：阿蘇のくらしと豊かな草原（導入）

1 学習のねらい

- ・かつて、草原の草が暮らしの中でたくさん使われていたことを知る。
- ・草を使う中で生まれた知恵や文化を知り、身近にある草原に興味をもつ。

○実施について

- ・所要時間：1コマ
- ・実施場所：教室
- ・対象：小学校4年生～
- ・実施時期／季節：9月～10月

2 準備するもの

- ＜学校等が用意するもの＞
- ・導入DVD、紙芝居など
 - ・ワークシート
- ＜子どもたちが用意するもの＞
- ・筆記用具

○講師・スタッフ等

- ・特になし

3 学習の進め方

(1) 草原と草の利用について、おじいさん・おばあさんなどに聞いてきた話を発表（5分）

※学習に入る前に、各自家の人に、暮らしの中で草原や野草がどんな風に利用されていたか、その中でどんな行事があったかなどについて聞いておきましょう。

(2) 導入DVDにより、草原と地域のくらしについて概要を知る（10分）

DVD 「カルデラの成り立ち」～「草原は生きものたちの宝庫」までを視聴
⇒草原と地域のつながりについて概観を知る。

(3) 草の利用を中心に草原の1年の営みを学ぶ（20分）

- ・スライドまたは紙芝居を使いながら学習。草の利用と人々のくらしを紹介。草原が育んだ文化に関連して、子どもたちに質問を投げかけながら進める。

＜質問、解説の例＞

- *かつては暮らしの中でたくさんの草原の草が使われていた。どんな使われ方をしていた？
→牛馬のエサ、田んぼの緑肥、茅葺き屋根の材料、風呂焚きなど
- *夏場の朝草刈り、秋の干し草刈りは農家の大事な仕事。農家の人は集落から山の上まで続く坂道を登って草原に行き、草を刈っていた。外輪山上にある牧野で刈ったたくさんの草を、車もない時代はどうやって里（自宅）に運んでいたのか？
→ひと抱え位の草を束ねて、その束を牛の背中に積んで里に降ろす。1頭に6束（左右に振り分け）積んで、これが1駄（草の量を示す単位）。牛を引いて坂道を何度も往復した。
→各集落から自分たちの使う草原（牧野、原野ともいう）に登る道があった（草の道）。
→秋には冬の間の牛馬の飼料として大量の草を刈る。一度に全部降ろせないので、草小積みにして草原で保管。草小積み1つに小積む量は10駄（地域によって差がある）。牛10頭分。
- *牛馬の餌にする干し草は、どうして秋に刈るのか？
→栄養価の高い草を食べさせるため。青みのあるうちに刈って、天日に干して保管する。
→秋の彼岸を過ぎた頃に刈る草にはカビが生えにくいと言われていた（先人の知恵）。

(4) 次回の草小積みづくりに向けた準備（10分）

- ・ステップ2では、地元の草原へ出かけ、草小積みづくりを体験する。
- ・草小積みづくりの際に、見たいこと、知りたいことなどを挙げ、次の学習への期待感を高める。

4 配慮事項

- ・効果的に学習を進めるために、ステップ1とステップ2の間隔があまり開かないようにスケジュールを組むことが望ましい。

5 展開や応用

- ・既に草原学習の経験がある場合や、他のプログラムで導入 DVD を使って学習が行われている場合は、DVD を使わず、草の利用に関する学習を中心に進める。

参考

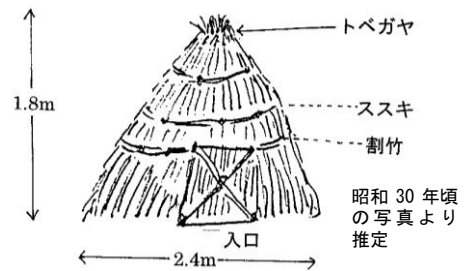
★草小積み★

刈り取った草を束にして積み上げたもので、通気性がよく草が傷みにくい草の貯蔵法です。昭和 40 年代までは晩秋になると、外輪山上の稜線に数多くの草小積みが並び、草の需要量の多さを示していました。農家の人々は、急傾斜地であろうとも草小積みを垂直に積み上げる技術を持っていました。今は、機械で梱包した白いロールが主流になり、草小積みを見かけることも少なくなりました。



★草泊まり★

秋に行われる干し草刈りの期間中、採草地の近くで野営すること、あるいは野営する時にススキで作る小屋のこと。阿蘇地方では、昭和 30 年代まで北外輪山地域の端辺原野で行われていました。南小国町の中原地区や満願寺畜などから、多い時は 150 戸余りの農家が長い道のりを経て原野にやって来て、泊まり込みで草を刈り、草小積みを作って冬に備えていました。



★草の道★

阿蘇谷の集落と外輪山上の草原を結ぶ坂道で、人と牛馬が一体となって草を運んだ石畳の坂道はふるさとの文化遺産と言えます。外輪山上の草を放牧や採草に利用するには、牛馬も人もこの急な坂を越えなければならず、道の維持管理は集落の大切な仕事でした。北外輪山の崖を伝う坂道は一の宮町だけでも 25 を数えます。



★盆花採り(ほんばなとり)★

盆花は、お盆に先祖のお墓に供える野の花のこと。阿蘇には、祖先を敬うために野の花を墓前に手向ける風習があり、かつて「盆花採り」は盂蘭盆(うらぼん)の時期(8月中旬)の農家の仕事の一つでもありました。昭和 50 年頃の写真をみると、ヒゴタイなどの植物も、かつては草原の花として普通に見られたことがわかります。



(「阿蘇草原再生全体構想」より)

※資料：一の宮町史「草原と人々の営み」大滝典雄著)

ステップ2：草小積みを作ろう（野外体験学習）

1 学習のねらい

- ・体験を通して、先人の知恵や草を利用するための苦労を知る。
- ・身近にある草原の素晴らしさを体感し、大切に思うようになる。

○実施について

- ・所要時間：3コマ
- ・実施場所：地元牧野の草原
- ・対象：小学校4年生～
- ・実施時期：9月～10月

2 準備するもの

<事前準備・依頼等>

- ・学校～牧野間の移動手段の確保：スクールバス、貸し切りバスなど
- ・地元牧野の使用許可（※）
- ・講師（地元の方）、スタッフ（※）
- ・草切りと乾燥：地元の牧野の方と調整し、草小積み体験の前に活動場所の草を刈り乾燥させておく（※）

（※）協力団体またはコーディネーターによる対応が可能

<学校等が用意するもの>

- ・ワークシート、救急箱

<子どもたちが用意するもの>

- ・動きやすい服装、軍手、帽子、飲み物、タオル
- ＊天候によっては暑さ対策が必要
- ・筆記用具

○講師・スタッフ等

- ・講師：牧野組合長など地元の方
- ・スタッフ：担当教諭、協力団体等

3 学習の進め方

(1) 学校で集合 →牧野へ (30分)

- ・活動の趣旨やスケジュール、注意事項を確認した後、地元の牧野へ向けて出発。

(2) 草小積みづくりについて講師から説明 (15分)

- ・草小積みについて解説。
 - －草小積みを作った理由、作るために必要なワザや使う草の量、積み上げ方など
- ・体験の手順を説明。
- ・草を稲手で括る方法を伝授してもらおう。→それぞれ試してみる。

(3) 草集め、草運び、小積みの作業 (60分)

- ・既に刈り取って乾燥させてある草を集めて稲手で束ね、小積み場所まで運ぶ作業を手伝う。
- ・草を積み上げる組合の人に、草の束を渡す。

(4) 体験の感想、質問 (15分)

- ・草小積みづくりを体験して感じたことや学んだことを発表。
- ・草小積みや草の利用について、疑問に思ったことなどを講師に質問。
- ・講師の方には、質問に答えながら、草の利用に関連して牧野に残る文化的資源や行事などについても話して頂く。例えば、盆花採り、馬頭観音／山の神、草の道など。



(5) 活動終了 →牧野から学校へ戻る (30分)

(6) ふりかえり (5分)

- ・学校へ戻ってから、体験活動で学んだこと、感じたことなど、さらに興味を持ったことなどを、各自ワークシートに記録しておく。

4 配慮事項

- ・9月～10月は、農家は稲刈りや刈り干し切りなどで大変忙しい時期。牧野組合や講師の方のご都合をよく確認したうえで実施スケジュールを設定する。
- ・講師の方に話していただく内容や質問項目は、事前に講師の方とよく調整しておく。
- ・採草地は農家の人々が草を刈る大切な場所なので、荒らさないように気をつけながら利用する。
- ・草原にある草花は採らないこと、観察する時は自分が草花に近づくように心がける。
- ・ヘビやハチなどに気をつける。

5 展開や応用

◇時間があれば、馬頭観音を見学する

- ・草小積み体験の後、時間があれば、牧野内にある馬頭観音などを見学する。地元の方に解説してもらえば、草原の利用と牛馬の放牧について、地域の人々の思いを知ることができる。

◇草の道を訪ねる

- ・どこの牧野にも、かつて集落と草原の行き来に利用した草の道がある。現在も地元で管理されていて歩ける道があれば、草の道を歩いて牧野へ登って草原を体験するのもいい。
- ・道の途中には馬頭観音や昔の休憩所などがあることが多く、草原とともにあった地域の暮らしを感じることができる。

◇草泊まりづくりを体験する

- ・草泊まりを作ることができる講師の手配や準備時間が十分に取れば、草小積みづくりに代わって草泊まりづくりを体験することも考えられる。(骨組みの竹や紐など、材料と道具が多く草小積みづくりよりも時間と手間がかかる)

参考

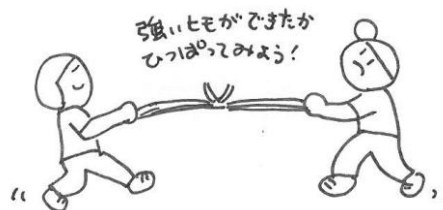
【草原のススキで稲手（草稲手）を作る】

草稲手づくり(簡易バージョン)

かるくひと握りのススキを2つに分けて、



草小積み（くさこづみ）づくりでは、刈った草を束ねる際に「稲手（いなで）」と呼ばれる稲ワラで作ったヒモを使いますが、それを草原の草で作ることもできます。時間があればススキを使ったヒモ作りに挑戦してみましょう！



※草稲手の本格的な作り方は、「阿蘇草原のわざ」（九州地方環境事務所製作）のP17を参照

ステップ3：ふりかえりとまとめ

1 学習のねらい

- ・草を利用することが、草原を守ることに繋がっていることを知る。
- ・地域の宝がたくさんある草原を知り、守っていきたいと思うようになる。

○実施について

- ・所要時間：1コマ
- ・実施場所：教室
- ・対象：小学校4年生～
- ・実施時期／季節：9月～11月

2 準備するもの

- ＜学校等が用意するもの＞
- ・スライドや紙芝居など
 - ・ワークシート
- ＜子どもたちが用意するもの＞
- ・筆記用具

○講師・スタッフ等

- ・講師：地元の専門家など（1名）
- ・スタッフ：特になし

3 学習の進め方

(1) 草小積みづくりで学んだことを発表（10分）

- ・ステップ②のワークシートを見ながら、草小積みづくりの感想、体験を通して学んだことやもっと知りたいことなどを発表し、情報を共有する。

(2) 草の利用と草原の環境、さらに草原で育まれた文化について学ぶ（20分）

- ・スライドや紙芝居を見ながら、草を使うことと草原環境について学ぶ。

（内容例）

*大量の草を使うことにより、草原が管理されてきた。

－毎年、草を使うために野焼きが行われ、きれいな草原が維持。

－草原を利用し、管理することで、様々な植物が開花する草原が維持されてきた。

→8月のお盆の頃の採草地には色とりどりの草花が開花し、人々はその花を墓前に手向ける習わしがあった。 →盆花採り（ぼんばなとり）

(3) 草原の草の利用方法についてアイデアを出してみよう（5分）

- ・今、草原の草はあまり使われなくなってきた。せつかくの地域の資源。何かに使えないだろうか？ 自由にアイデア出しをする。⇒黒板等へ書きだす

(4) ふりかえり（10分）

- ・これまで行ってきた活動をふりかえり、感想を発表し共有する。

4 配慮事項

- ・草原の利用が減って草原面積が減少してきている現状については、ステップ②で講師の方よりお話を聞いていれば、もう少し踏み込んで説明しても良い。

5 展開や応用

◇地元に残る草原文化について調べてまとめる

- ・この学習の応用として、身の回りの大人たちに話を聞き、人々の暮らしと草原がどうかかわっていたのか、今でもどんなことに使われているのかをまとめ、レポートを作成する。

◆実施協力団体等

- ・国立阿蘇青少年交流の家
- ・環境省九州地方環境事務所阿蘇自然環境事務所

◆草刈り・草原体験のフィールドの提供

- ・地元の牧野組合等の協力が考えられますが、事前に承諾を得ることが必須です。

◆講師の紹介

- ・フィールドとあわせ、「阿蘇草原キッズ・プロジェクト」ワーキンググループ事務局が紹介します。

◆参考資料

- ・「つつい子供に伝えたい 阿蘇の草原ハンドブック」／環境省九州地方環境事務所
- ・「阿蘇の草原ワークブック」／環境省九州地方環境事務所